

「日本の皆さんに、心からありがとうと言いたい」——毎日新聞の読者の寄金をもとにネパール・プトワル市郊外に計画中の子ども病院。その予定地の測量が今週から始まることになり、スルヤ・プラサド・プラダン市長が本紙に感謝のメッセージを寄せ、病院建設に伴う都市整備の夢も語った。

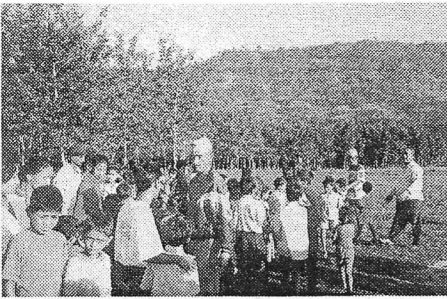
## ネパール「子ども病院」建設

昨年の阪神大震災では、ネパールの医師も救援に駆けつけてくれました。病院建設は、そのお返しの意味も込められています。



でも地震があります。阪神大震災のことは詳しくは知らないが、多くの日本人が苦しんだと聞いています。開発が進んだ日本にも、富める人も貧しい人もいます。私たちがお金も技術もありませんが、日本人が私たちを助けてくれる。私たちがお金も技術もありませんが、日本人が私たちを助けてくれる。私たちがお金も技術もありませんが、日本人が私たちを助けてくれる。

プトワル市郊外の病院建設予定地



子ども病院へ期待します。市長 この市には国立病院が一つあり、子どもたちの病棟もあります。しかし、定員33人の医師は20人しかおらず、常に欠員状態です。小児科の専門病院ではないため

た。早ければ来春にも着工できるという、AMD（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）と協力して読者ネパールを結んだ今回の「顔の見える援助」に、現地の日本大使館も「これまでにない画期的な試み」と高く評価している。市長へのインタビューは次の通り。【藤原 健、写真も】

## 十分な医療」に期待大

「重い病気の子どもは遠く離れた別の病院に転院させるを得ないケースがしばしばあり、多くの子どもが十分な医療を受けられないまま死んでいます。日本の皆さんのおかげでできる新しい病院は、日本に留学した小児科専門のAMDネパールの医師たちが責任を持って運営してくれるという点なので、高いレベルの医療が行われると確信しています。さらに、この病院は10万人のプトワル市民のためだけでなく、大きな病院がないネパール西部の住民のためにも役立つことができそうです。病院ができれば、市も活性化しますね。」

## 十分な医療」に期待大



インタビューに答えるプトワル市のプラダン市長

現地プトワル市  
プラダン市長が  
感謝のメッセージ

◆市長からの感謝状◆  
友好国 日本の皆さんから寄せられた資金を心から歓迎します。この市につくる子ども病院に、皆さんの支援を今後ともよろしく願ひ申し上げます。病院建設には、私も努力します。感謝を込めて。  
プトワル市長、スルヤ・プラサド・プラダン

मित्रराष्ट्र जापान का जनताहरू  
तपा आम्हा जापान देश सर्वत्र  
सम्पन्न-धन आनिदि हरे जापि कला  
गर्हदु शस नगर-स्थापना हुने  
भरको लोभार्थ वात तथा महीला  
पस्यनार लाए पुर्ण सहयोग गरी  
तिहुहुन शहीदको अनुरोध गर्नु  
को अस्पताल बनाउनु भैरे गर्नु  
उर्ण सहयोग गुहाउने हु। जेनेपान

2009/1/22  
मसुब  
सुबल नगर पालिका

救援金にご協力を  
ネパールの子もたちへ目に見える援助を実施するため、今年のキャンペーンは現地に進められている子ども病院建設計画に協力しています。救援金は左記へ郵便振替か現金書留で送参ください。  
〒530-051 大阪市  
北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団  
海外救援金係（郵便振替）  
009701911  
2009011

# 「顔の見える援助」着々と

建設計画の現状  
子ども病院は読者の寄金を資金に、AMDネパール（ラメシユワル・ボカレル医師らネパール医師約25人）が実質運営する。プトワル市とAMDネパールがこのほど協議。今週に始まる測量を第1段階とし、予定地を所有するネパール政府から3カ月以内に譲渡を受けるよう現地に置いた建設推進委員会市長、ボカレル医師ら5人が折衝することを決めた。これにより、早ければ、来春にも着工が可能になった。読者も一体となった今回の病院建設計画には、日本大使館も大きな期待を寄せている。

建設予定地は、プトワル市中心部から約1.5キロの小高い牧草地。交通の便はつくるのにも有利。病院に利用可能な広さは約70アール。騒音もなく、空気・土壌の汚染もなく、空気の清浄施設にはささしい環境といえる。

電話はまだつながっていない。地形上、自然の排水路が利用できるので、雨水処理や下水処理のシステムをつくるのにも有利。病院に利用可能な広さは約70アール。騒音もなく、空気・土壌の汚染もなく、空気の清浄施設にはささしい環境といえる。

知りたい聞きたい

た救援金が相次ぎました。世界の難民の深刻さを紙面で伝え、救援金を募る「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」に毎日新聞社と毎日新聞社会事業団が本格的に取り組んだのは1979年から。毎年、アジア、アフリカなどに特派員を派遣しキャンペーンを展開、ユニセフなどへ11億円以上の救援金を贈っています。18年目の今年は、「貧困撲滅の国際年」。国連の最貧国に認定され

ているネパールに連見新也、懸尾公治両記者を派遣。「明日を生きたい」ヒマラヤのふもとから」のキャンペーンを展開してきました。今回は、AMD A（アジア医師連絡協議会）と協力、読者の皆さんの善意が「病院建設」という目に見える形で実っていくことに、担当の記者らは、これまでと違った喜び、充実感を味わっているようです。【新社会面編集長・中島 耕治】